解

題

能面図

書型　写本。袋綴帙入乾坤二冊。二六七×一九四ミリ。

丁数　乾は墨付五十二丁、遊紙前後各一丁。坤は墨付四十三丁、遊紙前二丁後一丁。

表紙　花菱繋布貼表紙。

外題　左肩題僉「能面圖　乾（坤）」。

内題　なし。

料紙　薄様紙。

奥書　此二部ニ写置面者、秦川勝ヨリ今猶、金春大夫家蔵之雖面、故有テ淀之藩渡辺云何老写、猶又、懇望、弘化丁未年清秋再写　森邑家蔵（朱印）

印記　朱印。「乾」見返表、「宝岑」「寶玲文庫」「残花書屋」「鴻山文庫」「関西大学図書館蔵書」。裏表紙見返表「戸川氏蔵書印」「雪喬図書」。

「坤」見返裏、「鴻山文庫」「残花書屋」「寶玲文庫」「雪喬図書」。裏表紙見返「戸川氏蔵書印」。

はじめに

本書は奥書によれば、能楽の金春大夫家所蔵の能面九十面を淀藩の渡辺某が写し、それを再転写して二部に編集

したものを森村某が弘化四年(一八四七)八月に家蔵したものである。詳細については本論で述べたい。いずれにしても本書が再転写本であるとは言え、能面を能面裏までも再現描写した史料は数少なく、しかももとは江戸時代以前の金春家の所蔵になる点だけをとっても本書の価値は高いと言える。本解題では金春流能面図ということに絞って、以下の考察に及びたい。また、本書は前回第二回配本の『勧進能并狂言尽番組』と同じく本学図書館において鴻山文庫旧蔵本を購入架蔵したものである。鴻山文庫とは、わんや書店主、故江嶋伊兵衛氏が蒐集された能楽資料を言う。なお、「関西大学図書館蔵能楽資料について～鴻山文庫旧蔵書をめぐって～」と題して『籍苑』二十九号(平成元年九月、関西大学図書館)に、のちに拙著『狂言史の基礎的研究』(平成六年三月、和泉書院)に本書のことについて一部紹介した。なお、本書の書型は前項に記す通りだが、印刷の都合上縮刷をほぼ六〇%としてある。以下、本書を「関大本」と称する。

一、「関大本」の特色

本書における書誌については冒頭で記した通りだが、今少しその特色と問題点を整理してみる。

a、第4面の般若面の角の先と顎の先端が切れている例を始めとして判明することは、本書は形状を整えるために天地が裁断されている。

b、本書は袋綴となっているが、面と面裏で丁度表裏一体になっている。念のため本書で言えば、各面の面裏は次頁に該当するわけである。第9面の釣狐横向面だけは特殊で今回の製本でも工夫を凝らしたところであるが、和紙一葉を広げて描いた形跡が見られる。面の絵のほうは絵師もしくは能面に詳しい者が丁寧に描いたのであろうが、面裏のほうは面ほどには丁寧に描かれていない。たとえば第5面の蛇の面裏は角が省略されている。

他の面の面裏が錯簡で混入したかとも考えたが、後に述べる「国会本」とまったく同じ形状である点から考えれば、当初から面と面裏は一体となっていたであろう。

c、面の並べ方はある程度まとまっているとは言えるものの、それでも第3面の不動面や第9面の釣狐面などの位置を考えてみると不自然である。後に述べるが、翁面に限っても一面だけの書写であって、これが金春家にあったすべての面であるとは考えられない。金春家で書写した初期の段階で金春家で了承を得た面についていわば片っ端から描いていったのではあるまいか。なお、本書には各袋綴じに間紙が挿入されてあり、それらには鉛筆書きでナンバーがふってある。のちに写真撮影の時に使用されたものと思われる。

d、本書は面裏まで描かれているのが特色でもある。他の流儀で能面の絵はあっても大方は面裏は省略されている。又、たとえば第1面の翁面で、「当赤地金入／嚢茶地金入」とあるのは、この面が茶地金入の袋に入れられてあり、更に面を保護するために赤地金入の面当がしてあることが示されている。なお、各面は箱に納められていたか箪笥の引き出しに整理されて入れられていたものと思われる。

e、本書には江嶋伊兵衛氏の書き込みがまま見受けられる。それについては「国会本」との比較のところで指摘する。

f、本書に蔵書印が捺印されていることは冒頭に記した通りであるが、鴻山文庫蔵印の「鴻山文庫」「こう山文庫」と本学図書館の蔵印以外に捺印されているものを確認すると次の通りである。

「残花書屋」「戸川氏蔵書印」＝戸川残花の捺印。

「寶玲文庫」「宝岑」＝フランク・ホーレーの捺印。

「雪喬図書」＝「雪喬」は森邑氏の号であろう。

二、「国会本」について

「関大本」の能面と同一の形状、同一の絵を有するものがもう一本ある。国立国会図書館古典籍閲覧部に『能面之図』として和本一冊があるのがそれである（以下、「国会本」と称する）。書誌を記すと次の通りである。

書型　写本。袋綴一冊。二六九×一九七ミリ。
表紙　外覆表紙と中朱表紙の二重表紙。
丁数　二重表紙を除くと実質九十三丁。内表紙一丁分のあとに遊紙一丁。
外題　二重覆表紙共に「能面之図」。
内題　内表紙「古代之作　能面之図」。
料紙　薄様紙。
奥書　なし。
印記　外覆表紙に「帝国図書館蔵」の各一字浮出模様。中覆表紙に「帝国図書館蔵」「やま本」「大正4・1・27購求」。遊紙に「やま本」。

すなわち、二重の覆表紙は保存用のために後に作成されたもので、大正四年一月二十七日に購入されたものである。寸法は「関大本」と同じ大きさで、料紙も同じく薄様紙で、敷き写し可能である。墨付は九十一丁で、実質上、面九十面が描かれてある。九十面の絵は絵具の配色が所々いささか異なる（特に第60面から63面と、第70面は能面の地色が緑という普通には考えにくい彩色を施している）とは言え、「関大本」の絵とまったく同じと言ってよい。「国会本」は一冊であるが、「関大本」の乾坤二冊の面の絵の配列順序と完全に一致する。又、「関大本」には天地

の裁断が確認できるが、その裁断の箇所と言い、同一のものであると言ってよい。「関大本」と「国会本」が親子関係か兄弟関係であることは確実である。「国会本」が「関大本」と異なる大きな点は「国会本」には奥書がなく、「関大本」に相当する能面一覧貼紙（本書五頁）がないことである。

なお、「国会本」には丁付が施されてあるが、「四十一丁」の次に「又四十一丁」とあり、八十丁から八十九丁は記されておらず、「七十九丁」の次が「九十丁」となっている。これらは単なる記載ミスと考えておきたい。又、「国会本」に押捺される「やま本」については不明である。

三、「関大本」と「国会本」の記述部分の比較

「関大本」と「国会本」は同一であるとは言うものの、各能面図の表裏に書かれている記述にいささかの相違がある。以下に示す。「関大本」では第1面から第48面が「乾」、第49面から第90面が「坤」にある。

〈凡例〉頁数は本書の図に対応する。記号の［　］は面裏の朱などの本来の書き込み、もしくは彫。＜　＞は花押。「　」は裏面記述。／は行替。《　》は国会本に記載、（　）は同不記載の箇所。傍線部は江嶋伊兵衛氏の書き込み。

第1面（七頁～八頁）翁［日光作］「当赤地金入／嚢茶地金入（銘金彩／延長ノ頃ノ人）日光（作）《ハ翁面ノ作人》／三井寺僧（当赤地金入／嚢茶地金入）」

第2面（九頁～一〇頁）黒尉［福来作］「（当赤地金入／嚢茶地金入／銘金彩）応永（之頃ノ人）《年中／天保十三迄四百五十九年》／福来正友ト云／石王兵衛／越前一条」

第3面（一一頁～一二頁）不動（「金剛家面写／当白地紙子袋萌黄金入）出目杢之助作（」）

第4面（一三頁～一四頁）般若／額白［宝来作］（「袋赤地金入」）

第5面（一五頁～一六頁）蛇［赤鶴作］「（当赤地金入／袋茶地金入）《赤鶴ハ》越前大野／弘安年中《天保十三迄四百八十年》」

第6面（一七頁～一八頁）般若／面影［徳若作］「（当赤地金入／袋茶地金入）文永年中／《天保十三迄五百七十六年／徳若ハ》兼倉安野太子」

第7面（一九頁～二〇頁）蛇／（白額）《額白》「本面赤鶴作／友水写（袋赤地紙子／本面赤鶴作／友水写）」

第8面（二一頁～二二頁）般若［夜叉作］「（当赤地金入／袋茶地金入／銘金／又）春若《又夜叉》トモ云／永和年中《天保十三迄三百六十五年》（大和守後丹後守守成、近江守トモ云／夜叉、春若同人ニ非スモ同一人トスル一説モアリ）」

第9面（二三頁～二六頁）狐／赤鶴作之由［赤鶴作之由］「年号前ニ在」（「赤鶴作之由」）

第10面（二七頁～二八頁）髭小尉［小牛作］「（当赤地金入／当絣地金入／貳ツ）小牛ハ大和竹田／永和年中／年数前ニ在」

第11面（二九頁～三〇頁）阿瘤尉［永見作］「永見ハ越中ノ者／法花僧／永和年中（当ニ茶地金入／赤地金入）」

第12面（三一頁～三二頁）髭阿瘤［渋（手）《午》／一透作／兵庫］（「当白紙子／黒」）

第13面（三三頁～三四頁）三光尉［三光坊作］「三光ハ比叡山ノ僧／前同時代（当萌黄／金入／白絖）」

第14面（三五頁～三六頁）片尉［イセキ］（「当ニ茶金入／白絖」）

第15面（三七頁～三八頁）飛出悪尉［宮野作］（「宮野ハ目利書又仮面譜ニアリ／当ニ茶金入／白絖」）

第16面（三九頁～四〇頁）（癋見悪尉）（「作不知／当白羽二重／袋茶地金入」）

第17面（四一頁～四二頁）朝日尉［〈花押〉］（「小牛作／当絣地金入」）
第18面（四三頁～四四頁）舞尉（「作不知／当茶紙子」）
第19面（四五頁～四六頁）めうが悪尉［めうかあくぜう／作不知］（「当紫羽二重」）
第20面（四七頁～四八頁）鷲鼻悪尉［出目友水］「石王兵衛（ノ）写／出目友水（友水作之由／当白絖袋／萌黄金入）」
第21面（四九頁～五〇頁）木地小尉（「元休作／当添」）
第22面（五一頁～五二頁）石王尉「黒／石王兵衛（ノ）作、越前一条福来之時代／在前」
第23面（五三頁～五四頁）舞尉「黒」
第24面（五五頁～五六頁）増髪［越前出目作］（「当赤地金入／袋絣地金入」）
第25面（五七頁～五八頁）小面［宝来作］（「当赤地金入／袋茶地金入」）
第26面（五九頁～六〇頁）孫次郎［出目友水］（「当白絖／袋茶地金入」）
第27面（六一頁～六二頁）孫次郎「井関作（当白絖／袋茶地金入）」
第28面（六三頁～六四頁）宝来女［宝来作］「金剛面写／十八作（当白絖／袋萌黄／十八ハ越前出目元休満真ノ初名／仮面譜ニヨレハ越前出目）」
第29面（六五頁～六六頁）［増］「（当赤地金入／袋茶地金入）増阿弥久次ト云／永和年中／年数前同」
第30面（六七頁～六八頁）増［出目友水］黒「（友水作）女増上トモ（当白絖／袋絣地）」
第31面（六九頁～七〇頁）［出目友水］
第32面（七一頁～七二頁）萬肥（萬媚ハ毛描キ異ル）［大和作］黒塗（「袋袍地輪無」）
第33面（七三頁～七四頁）泥眼［増阿弥作］「前ニ在（当赤地金入／袋絣地金入）」

第34面（七五頁～七六頁）痩女［増阿弥作］（「当赤地金入／嚢絣地金入」）
第35面（七七頁～七八頁）姥［出目友水］黒（「千代若作友水写／袋赤地金入／面目利書、仮面譜共ニ千代若トアリ」）
第36面（七九頁～八〇頁）龍女［井関作］（「若狭作／当白絖／嚢絣地金入」）
第37面（八一頁～八二頁）橋姫（「井関作／当白絖／嚢絣地金入」）
第38面（八三頁～八四頁）山姥［出目友水］（「当白絖／袋茶地金入」）
第39面（八五頁～八六頁）班女［班女］（「作不知／嚢赤地／紙子」）
第40面（八七頁～八八頁）曲見［福来作］「《黒塗》（当赤地金入／袋茶地金入）」
第41面（八九頁～九〇頁）痩女［文蔵作］（「袋御納戸茶金入」）
第42面（九一頁～九二頁）天神／赤鶴作友水写（「当白絖／嚢絣地金入」）
第43面（九三頁～九四頁）天神［出目友水／赤鶴作写］
第44面（九五頁～九六頁）三日月［〈花押〉友／福来作］「福来正友／応永中前同（当赤地金入／袋絣地金入）」
第45面（九七頁～九八頁）千種［千種作／若狭写］（「当赤地金入／袋茶地金入」）
第46面（九九頁～一〇〇頁）霊神［文蔵作／田綱］（「当赤地金入／袋茶地金入」）
第47面（一〇一頁～一〇二頁）千種／又呵似（［千種作／若狭写］「当白絖／袋絣地金入」）
第48面（一〇三頁～一〇四頁）大癋見［徳若作］（「当赤地金入／袋茶地金入」）
第49面（一一三頁～一一四頁）大癋見「《徳若作》遊正の山／徳若／文永年中／年数は般若ノ前ニアリ（当赤地金入／袋茶地金入）」
第50面（一一五頁～一一六頁）大癋見［赤鶴正作／寿］（「袋茶地金入／赤鶴前ニ年数在」）

第51面（一一七頁～一一八頁）小癋見［（春若作）黒塗］「夜叉トモ／永和年中《年数前ニ在》（当赤地金入／袋茶地金入）」

第52面（一一九頁～一二〇頁）小癋見（［徳若作］）「《前ニ年数在》（当赤地金入／袋茶地金入）」

第53面（一二一頁～一二二頁）長霊癋見［（三光作）〈花押〉］「《三光前ニ在》（下間少進法印ノ花押カ／三光坊作／フサタネ写／当赤地金入／袋茶地金入）」

第54面（一二三頁～一二四頁）長霊癋見（「友水作／袋赤地金入」）

第55面（一二五頁～一二六頁）猿癋見（「一透作／袋赤地金入」）

第56面（一二七頁～一二八頁）牙癋見［〈出目〉クリイロ］《出目作》（赤鶴作／元休写／袋茶地金入）」

第57面（一二九頁～一三〇頁）大天神［大てんじん］「地黒（作不知／袋赤地金入）」

第58面（一三一頁～一三二頁）長霊癋見［出目庸吉］「（焼印出目庸吉カ／杢之助作当）」

第59面（一三三頁～一三四頁）千種／ゴフンニ生エンジマジリノヌリ［千種作］中イン（「洞水作／当／嚢萌黄金入」）

第60面（一三五頁～一三六頁）獅子［赤鶴作／十八写］（「当白絖／袋赤絣地金入」）

第61面（一三七頁～一三八頁）大飛出／金ニクロメヲカケタルヌリ［角坊作］ウスクロ（「当赤地金入／袋茶地金入」）

第62面（一三九頁～一四〇頁）大飛出／ウスキン［赤鶴作／杢之助写］（「当白絖／袋茶地金入」）

第63面（一四一頁～一四二頁）泥小飛出／キンクロメヌリ［寶来作］（「当赤地金入／袋茶地金」）

第64面（一四三頁～一四四頁）小飛出［赤鶴作／ワニ／クロキン］「《年数在前》（小飛出／当赤地金入／袋萌黄金入）」

第65面（一四五頁～一四六頁）（小／大飛出）［秦氏昭〈花押〉］「（金春大夫氏昭自筆花押／照ラシ誤ナシ）秦ノ川勝ノ末／金春先祖（小飛出／当白沙綾）」

第66面（一四七頁～一四八頁）泥小飛出／金塗（「春若作／当赤地金入／袋茶地金入」）
第67面（一四九頁～一五〇頁）猿飛出（「児玉長右衛門作／当浅黄羽二重／袋唐織」）
第68面（一五一頁～一五二頁）頻早（「鞏」）［赤鶴作／洞伯写］（「当白絖／袋絣地金入」）
第69面（一五三頁～一五四頁）獅子口［〔木入作／友水写〕］（「木工入ハ大宮大和真盛ノ法名／袋茶地金入」）
第70面（一五五頁～一五六頁）黒髭（「春若作／当茶地金入／嚢絣地金入」）
第71面（一五七頁～一五八頁）喝食［大和作］（「当白絖／袋絣地金入」）
第72面（一五九頁～一六〇頁）猩々［金剛頼勝十八写］ウススミイロ／イロガ（ハ）《ワ》リ／シブイロ（「金剛頼勝ハ右京／坂戸金剛系図ニヨレバ十三代大夫／正保四年四十九才／若名孫次郎、面ノ名人トアリ／十八ハ出目満真ノ初名カ／当赤地金入／袋絣地金入」）
第73面（一六一頁～一六二頁）猩々［徳若作］（「当茶地金入／袋絣地金入」）
第74面（一六三頁～一六四頁）童子［辰右衛門作］「《黒塗》（当赤地金入／袋萌黄金入）」
第75面（一六五頁～一六六頁）冠中将（「夜叉作／当赤地金入／袋茶地金入」）
第76面（一六七頁～一六八頁）中将［甫閑作］（「大野出目甫閑満猶／当白紙子／袋絣地金入」）
第77面（一六九頁～一七〇頁）源氏（「友水作之由／当茶紙子／袋絣地金入」）
第78面（一七一頁～一七二頁）邯鄲男（「徳若作／当赤地金入／袋絣地金入」）
第79面（一七三頁～一七四頁）邯鄲男［徳若作／竹田金春／秦氏昭〈花押〉］（「氏昭ノ花押ハ自筆ニ照ラシ誤リナシ／頼勝作元休写之由、当白羽二重／袋紺紙子／金剛頼勝、元休等ハ氏昭ヨリ年代遥ニ下ル可考」）
第80面（一七五頁～一七六頁）若男［春若作］（「当赤地金入／袋茶地金入」）

第81面（一七七頁～一七八頁）平太［（焼印）］《タメヌリ》（「大和作之由／当白絖／嚢茶地金入」）
第82面（一七九頁～一八〇頁）曲見
第83面（一八一頁～一八二頁）痩男［是閑作］「黒塗（当白絖／袋茶地金入）」
第84面（一八三頁～一八四頁）痩男［圓雲作］（「團松作／当赤地金入／袋茶地金入／ダンマツマカ」）
第85面（一八五頁～一八六頁）頼政［出目庸吉］（「出目杢之助作／当白絖／嚢赤地紙子」）
第86面（一八七頁～一八八頁）イセキ作／三光尉／ウラ［小井関作／ス、イロ／（同）スミ朱入］「（当ニ絣金入／茶金入）朝日尉ウラカヘ」
第87面（一八九頁～一九〇頁）千くさ［ちくさ写／千草］（「洞水作／当／嚢萌黄金入」）
第88面（一九一頁～一九二頁）小癋見［春若作］（「当赤地金入／袋茶地金入」）
第89面（一九三頁～一九四頁）長霊癋見［三光坊作／長霊之面ヲ見テニ分延ニ模ス／フサタネ〈花押〉］（「三光坊作／フサタネ写／当赤地金入／袋茶地金入」）
第90面（一九五頁～一九六頁）実盛［〈花押〉］（「作不知／写ノ文字判」）

四、先後関係

「関大本」と「国会本」がはたして親子関係なのか兄弟関係なのかとの問題が生じる。「国会本」には第2・5・6・8面に天保十三年（一八四二）の記述が見られるので、同書は天保十三年に作成されたと考えてよい。一方、「関大本」は弘化四年の書写である由の奥書を持つ。ここで今一度、「関大本」の奥書を見てみる。「此二部ニ写置面者、秦川勝ヨリ今猶、金春大夫家蔵之雖面、故有テ淀之藩渡辺云何老写、猶又、懇望、弘化」未年清秋再写　森邑家蔵（朱

印）」とある。

まず、「此二部」とあるのは乾坤二部とも考えられ、あるいは「国会本」が渡辺某の写した本かとも考えられるが、「国会本」と「関大本」の二部と考えたほうがよさそうである。すなわち両者は兄弟関係にある。渡辺某の所持していた写本を借りて天保十三年にまず書写し、五年後の弘化四年に再び書写したと考えるものである。その際、森邑某自身が書写したと考えてよいところだが、ここは慎重を期して渡辺某か誰かによって書写してもらって、森邑某はその所蔵者であると考えたい。そして、弘化四年に書写した時に能面一覧表と書写していなかった面当・面袋のことについても書き加えたという訳である。「関大本」は面当・面袋については金春家で確認させてもらったものかとも考えたが、そうではなさそうである。すなわち、渡辺本ではもともと能面一覧表と面当・面袋については記されていたと思われ、その点では「関大本」はより渡辺本に近いと言えよう。「関大本」と「国会本」の面の絵の順序や裁断の箇所がまったく一致することが決め手で、恐らく薄様の紙を当てながら二度に亘って敷き写しされたものであろう。それが奥書の「猶又、懇望（中略）再写」という言い方に表わされているのであろう。

以上をまとめて考えると、もともと金春家に所蔵されていた能面を淀藩の渡辺某が書写し持っていた。それを聞き及んだ森邑某が天保十三年と弘化四年に亘って転写してもらい、家蔵とした。天保十三年に書写した時は、絵の具も不充分で、面袋と面当てについては記さなかったので、弘化四年に改めて書写したのである。その後、渡辺家の本は山本家から国会図書館に、森邑家の本は戸川残花、フランク・ホーレーと所蔵は転々として鴻山文庫に入ることとなった、と考えるものである。

五、能面所蔵の変遷

「関大本」にしろ「国会本」にしろ、「能面図」のもとは能楽の金春家所蔵のものであった。能楽の大夫家に伝わる能面のまとまった史料としては江戸幕府に対しての「書上」をみるのが有効な方法である。恐らく何度も出されているものと思われるが、管見では慶安元年（一六四八）六月書写の書上控え「金春家之面覚」（法政大学能楽研究所、般若窟文書）が寛文十一年（一六七一）の『四座面鏡』に先立っている。両者は虫食いなどにより判読不明なところもあるので、それらを踏襲した『大野出目家文書』が中村保雄氏『能面』（昭和五十四年、駸々堂）に翻刻されているので、金春流関係のものを抜粋して資料Aとして次に記す。／印は行替。句読点は任意に付した。

資料A

一、金春太夫

天の面（世間にておそろし殿と申す面なり。能にかけ候面にては無御座候）／翁（聖徳太子御作秦川勝へ翁相伝之時、被下候面なり。即ち此の面につき昔より度々奇妙なる儀御座候面にて御座候）／三番三面（聖徳太子御作同断）／翁（弘法大師作）／小面（竜右衛門作）／般若（般若坊作。但し此の面につき昔より奇妙御座候）／三光（三光坊作）／小尉（同作）／曲見（越智作）／中将（竜右衛門作）／釣眼（赤鶴作）／邯鄲男（竜右衛門作）／増女（増阿弥作）／泥眼（同作）／姥（竜右衛門作）／喝食（越智作）／冠型童子（竜右衛門作）／山姥（福来作）／ちやうれい（ちやうれい作）／猩々（竜右衛門作）／平太（徳若作）／悪尉（三光坊作）／鼻瘤（同作）／顰（赤鶴作）／痩男（永見作）／蛙（同作）／大天神（赤鶴作）／大癋見（三光坊作）／増髪（徳若作）／小癋見（三光坊作）／石王尉（石王兵衛作）／顔長（竜右衛門作）／姥（同作）／小天神（赤鶴作）／小飛出（同作）／真角（しんかく作）／大飛出（一へん作）／あやかし（ひこいし作）／いしかわ（越智作）

金春家の狂言面／鼻引（竜右衛門作）／猿（赤鶴作）／武悪（同作）

右三品は大蔵弥右衛門家へ先代より預置き申候

右面数合四十二枚昔より代々持来候

右の資料Aからでもわかるように、翁面に限っても伝承を含めて、金春家には「天の面」と称されるものと、聖徳太子作、弘法大師作とされる三面があったことが知られる。「関大本」の日光作の翁面は含まれていない。又、狂言面は大蔵弥右衛門家へ預けられたものとする。しかし、その三面の中には「関大本」の釣狐の面は入ってはいない。

次に、同じく宝山寺文書に文化三年（一八〇六）書写の「金春家面并作者付」があり、この時点で大幅な能面所蔵の異動があったと思えるので、資料Bとして示しておきたい。なお、資料Aと一致する面に○を付した。

資料B

従古来金春大夫方ニ持侍候本面替面并作付

覚

○翁面（聖徳太子御作）／○三番三面（御同作）／父尉（日光作）／延命冠者（弥勒作）／○小面（辰右衛門作）／○曲見（越智作）／○増女（増阿弥作）／痩女（辰右衛門作）／老女（氷見作）／○姥（辰右衛門作）／○泥眼（増阿弥作）／○山姥（福来作）／○般若（般若坊作）／○冠形童子（辰右衛門作）／○平太（徳若作）／○喝食（越智作）／○小尉（三光坊作）／○三光尉（三光坊作）／○石王尉／○悪尉（福来作）／○中将（辰右衛門作）／○邯鄲男（辰右衛門作）／○ますかみ（徳若作）／○真角（真角作）／○あやかし（ひこいし作）／○大天神（尺鶴作）／黒髭（尺鶴作）／○大とひて（一透作）／○小とひて（尺鶴作）／○つり眼（尺鶴作）／○長霊へしミ（長霊作）／○大へしみ（三光坊作）／○小

へしミ（三光坊作）／○しかみ（尺鶴作）／○猩々（辰右衛門作）／○いしかわ連面（辰右衛門作）／○顔なか連面（越智作）

／都合三拾八面／右者本面ニ而御座候

○翁面（弘法大師作）／同（文蔵）

／台徳院様御代拝領本面写

小面（河内打）／同（近江打）／曲見（是閑打）／増女（是閑打）／痩女（古作）／泥眼（河内作）／山姥（徳若作）／万媚（作不知）／般若（河内作）／真蛇（尺鶴作）／小尉（小牛作）／三光尉（作不知）／石王尉（是閑打）／衛門尉（衛門作）／中将（河内作）／○小天神（尺鶴作）／○かわつ（永見作）／小へしみ（春若作）／黒へしミ（古作）／小形大とひて（尺鶴作）／邯鄲男（河内作）／猩々（作不知）

／右者替面ニ而御座候

○はなひけ（狂言面　辰右衛門作）／○さる（同　尺鶴作）／○ふあく（同　尺鶴作）

／都合三面／右者大蔵弥太郎家江先祖共より預ケ置申候

／右之通ニ御座候　以上／三月　金春八左衛門

右で注目されるのは、台徳院様すなわち二代将軍秀忠から拝領されたというところであろう。

本書に描かれている能面がその後どうなったのか最も関心の持たれるところである。最近では中村保雄氏「能楽諸座所蔵面の経緯について―とくに金春座を中心に―」（『京都文化短期大学紀要』第十四号、平成二年十二月）があるが、「大体の経緯」でもあるので、今少し年を追って説明したい。

能楽の危機は明治維新と大正大震災の時にあったが、特に金春流にはそれらが甚しく影響した。維新の混乱につ

いては池内信嘉『能楽盛衰記』（大正十五年五月、春秋社）所収の大倉繁次郎談にもあり、鳥羽伏見の戦い後、金春札の両替を迫って多人数が押し寄せ、「実に狼藉極ったことで、蔵の戸を開いて残してある道具類を取出す」ことがあったようである。その前後であろうか、金春家の能面は手放されて、大半は金春流の後援組織である諦楽社に入った。

金春家の能面を紹介した早い時期のものとしては、辻本朔治郎編『金春家能面之巻』（明治四十一年十二月、辻本朔治郎発行）がある。七十六世金春広運が和歌を寄せている。写真の重複、誤植に不備があるもののある程度のめどはつくかと思われるので、次に資料Cとして載せる。

資料C

翁（作者不詳）／小尉（作者不詳）／小尉（三光坊作）／中将（辰右衛門作）／中将（作者不詳）／小面（辰右衛門作）／曲見（作者不詳）／若曲見（作者不詳）／増女（増阿弥作）／若曲見（熊太夫作）／泥眼（増阿弥作）／小面（作者不詳）／平太（徳若作）／嫗（辰右衛門作）／連面（越智作）／痩女（辰右衛門作）／痩男（永見作）／邯鄲男（辰右衛門作）／小天神（作者不詳）／大天神（尺鶴作）／三光尉（三光坊作）／政頼（真角作）／大飛出（一透作）別に一面／般若（般若坊作）／橋姫（作者不詳）／石王尉（石王兵衛作）／十寸神男（作者不詳）／黒尉（作者不詳）／鷲癋見（作者不詳）／長霊癋見（長霊作）

次に大正大震災の影響では、先の『能楽盛衰記』によれば、金春会は「細川侯を会頭に、岡部子爵を副会頭に戴き、（中略）会員を募って隔月に能を催して来たが、大正十二年の震災に大打撃を受け、爾来中止の姿となった」ということである。その後に発行された能面関係のものとして、斎藤香村『能面大鑑』（昭和六年三月、わんや書店）がある。それに取り上げられる金春流特有の面として掲げるものを資料Dとして抜粋してみる。

資料D

翁（日光作）谷村直次郎氏蔵／髭阿古父（福来作）前田侯爵家蔵／髭小尉（福来作）大橋新太郎氏蔵／正尊悪尉（甫閑作）池田侯爵家蔵／甘柘榴悪尉　前田侯爵家蔵／住吉男（龍右衛門作）大西亮太郎氏蔵／冠形童子（是閑作）池田侯爵家蔵／十六童子（友閑作）池田侯爵家蔵／酒呑童子（龍右衛門作）著者所蔵／中喝食（孫十郎作）大西亮太郎氏蔵／蔵王　大谷伯爵家蔵／泥蔵王（甫閑作）橋岡久太郎氏蔵／舞姫（甫閑作）池田侯爵家蔵／小姫（是閑作）池田侯爵家蔵／顔長女（甫閑作）橋岡久太郎氏蔵／金春型小面　橋岡久太郎氏蔵

次に、野上豊一郎『能面』（昭和十二年、岩波書店）が「元金春流本面」として挙げるものを資料Eとして抜粋する。

資料E

「三光尉」　三光坊作　元金春流本面

「尉」面第一類。竪二一・八×横一七・七。諦楽社蔵。（奈良帝室博物館寄托）。

「黒髭」　赤鶴作　元金春流本面

「黒髭」。竪二〇・五×横一四・九。諦楽社蔵。（奈良帝室博物館寄托）。

「小面」　龍右衛門作　元金春流本面

若い「女面」。竪二二・四×横一五・二。諦楽社蔵。（奈良帝室博物館寄托）。

「般若」　般若坊作　元金春流本面

「般若」。竪二二・四×横一八・五。細川護立氏蔵。

戦後、諦楽社の能面は東京国立博物館に入った。『東京国立博物館図版目録　仮面篇』（昭和四十五年三月三十一

日、東京国立博物館）の解説によると「戦後に収納されたものに諦楽社旧蔵品四十七面、上杉家旧蔵品三十二面がある。諦楽社のものは、金春家から明治初年に手放されて諦楽社に入ったものである」とある。

次に、同博物館目録の整理番号と能面の名称のみを掲げる。各面の寸法と写真及びルビは省略した。

資料F

41翁　44黒式尉　46父尉　47延命冠者　48小尉　49三光尉　54朝倉尉　66石王尉　87大天神　88小天神　92黒髭
98中将　99中将　109平太　118邯鄲男　124冠形童子　132猩々　144痩男　145痩男　153十寸髪男　158小面　163増女　167増女　186曲見　187曲見　188曲見　189曲見　190曲見　191若曲見　192連　193連　194連　198姥　202泥眼　206鉄輪　216般若
217般若　225小癋見　232長霊癋見　233長霊癋見　235鷲癋見　238大飛出　241猿飛出　247顰　248釣眼　250行者　254恵比須

最近では、金春信高氏が「金春家能面解説」として『金春月報』の昭和六十年四月号より連載されているが、平成三年八月号の第三十七回分で中断されている。又、同書は昭和六十三年三月号より表紙に能面のカラー写真を掲載されており、今も継続中である。「関大本」の面一点ずつについての対照をここで示すべきであるかも知れないが、今は資料を提示するに止める。

おわりに

まとめと今後の問題点を列挙する。

一、本書を写した者がどのような人物で、何の目的でこのような能面を写したかという問題がある。まず、金春家の能面の全ての記録であるという観点からは本書は不充分である。先に翁面で見たように、本書では日光作の一面しか描かれておらず、書上に記された翁面のどれとも異なる。金春家の最も重要な面は外されていること

になる。次に、玄人の面打が手控えとしていたとも考えにくい。玄人であれば、面の細かい寸法は記していたのではあるまいか。かと言って、絵を描くことには充分才能があった者には違いない。又、当然のことながら能もしくは能面についての知識は充分に持っていたであろう。となると、能面に魅入られた絵の達者な金春流の熱心な素人弟子といった姿を思い浮かべる。

一、「関大本」の奥書にある「淀之藩渡辺云何老」というのがよくわからない。淀藩は現在の京都市伏見区に当たる。渡辺姓は京都歴史資料館に寄託されている渡辺美登家蔵書がそうではないかと当たりをつけて、ご当人の快諾を得て全資料を拝見したが能楽資料に直接結びつくものはなかった。

一、淀藩の能楽の実態が判然としない。渡辺美登家蔵書には淀城の図面もあり、それには明らかに能舞台が描かれているのだが、特に金春流との関わりについては森邑雪喬をも含めて今後の課題としたい。

最後に本書に記される能面と面打について索引を付ける。

まず、能面について、本書における能面の並べ方は、必ずしもまとまっているという訳ではないのは見てきた通りである。編集し直したいところである。しかし、現在においても能面の分類方法は種々提案されているが、編者によってまちまちで共通の方法が完全に確立されているものでもない。はっきりとしない場合の絵も多い。まだ無理に分類する段階ではあるまい。とりあえず引きやすいように五十音順に並べてみた。読み方は通行の読み方に従っている。表の数字の0は能面一覧表に対応し、その他の数字はそれぞれの面図に対応する。

次に、面打（能面の製作に携わった者）も同じように五十音順に並べてみた。簡単な説明も加えたが、面打には伝説に属する部分が多いので必要最小限に止めた。又、周知のように能面には面打名が明記されてあっても常に能面の鑑定すなわち本面と写しという模作の問題が残る。現代でも名人の手にかかれば技術的には中世の能面を再現

するのは可能だとも言われる。まして本書のように転写本に従う限りでは判定を保留するのはやむを得ないところである。いずれ面打の実態の解明が望まれる。

本稿をなすに当たり、江嶋伊兵衛氏の書き込みについて、西野春雄氏よりご教示を得た。感謝申し上げたい。

（関屋俊彦）